

「言っておくが、およそ女から生まれた者のうち、ヨハネより偉大な者はいない。しかし、神の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である(ルカ 7:28)」。このイエスの言葉、洗礼者ヨハネの偉さと、天使たちのことを語っているのだと思っていた。

ところが「神の国だったら、ほら、君たちのまわりにあるじゃないか(17:21 私訳)」というイエスの言葉と重ね見て、はっとした。ヨハネよりも偉大な「神の国での小さき者」とは、こりゃ私たちのことなんじゃないか。そんな大それた、おこがましくて違和感があるが、イエスは確かにそう語っておられる。どういうことなのか、落ち着いて受け止めよう。

ヨハネが父祖や預言者以上に偉大なのは(7:26)、うなずける。母の胎にある時からキリストに呼応し(1:41)、荒れ野で悔い改めの洗礼を受け(3:3)、イエスの道備えをしたことでも納得できる(3:16)。イエス御自身も先輩ヨハネのことを尊敬し、彼から洗礼を受けてもらってもいるし(3:21)。

「呼びかける声がある。主のために、荒れ野に道を備え、わたしたちの神のために、荒れ地に広い道を通せ(イザヤ 40:3)」。荒れ野はこのように信仰的な聖なる領域、「主の栄光がこうして現れるのを、肉なる者は共に見る(40:5)」神と人間とが出会う場なのだ。

洗礼者ヨハネはいわば「荒れ野という聖性」そのものであった(ルカ 3:4～6)。その悔い改め(3:8)と清貧の教えは(3:11)、いかにも荒れ野だ。

確固たる信仰の人ヨハネが、イエスの教えに迷っている。彼は二人の弟子を遣わして尋ねた。「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか(7:20)」と。

ヨハネは「わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない(3:16)」と言うほどイエスを崇敬していたが、ここに来てなぜ信仰が揺れ動いたのか。

イエスは、禁欲的で清らかなヨハネ(7:33)とはまるで逆で、傍から見れば大食漢の大酒飲み(7:34)、とりわけ穢れた徴税人や罪人と親しかったからか(7:34)。

イエスはヨハネの弟子に答えた。「行って、見聞きしたことをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、らい病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている(7:22)。つまりくんじゃないよ(7:23 私訳)」。

「荒れ野の聖性」にはほど遠いような「福音」が告げ知らされている。「見聞きしたことをヨハネに伝えよ」と言われても、荒れ野に馴染んだ弟子には、「福音」はゆるすぎて不可解だったか、不快だったか。

福音が告げ知らされる「ゆるさ」は聖霊の業、人間の自力はいささかも見あたらない。私たちが招かれ、福音が告げ知らされ、神を讃美し、八ヶ岳の山麓にキリストの体としての教会が現われる事実は聖霊の業に他ならない。

福音が告げ知らされ、私たちは神の国の最も小さき者として在る(7:28)。

信仰心や人格からすれば、私たちの誰もが、洗礼者ヨハネに遠く及ばない。だが私たちには福音が告げ知らされているゆえに、ヨハネ以上の者なのだ。「福音=よきおとずれ」とは何か。見、歩き、清められ、聞きうること、そして死にも捕えられないこと(7:22)。

「死んだ者にも福音が告げ知らされたのは～肉において死んだようでも～神との関係で、霊において生きるようになるため(1ペトロ 4:6)」。



《おまけのひとつ》

福音は風と糸 天と地を結んでいる 福音は伏流水 天水が地中まで落ちて地表に顔を出す 福音は木の葉 どこからか風に運ばれる すべて偶然ではない 福音の御手は私の祈りに連動している